

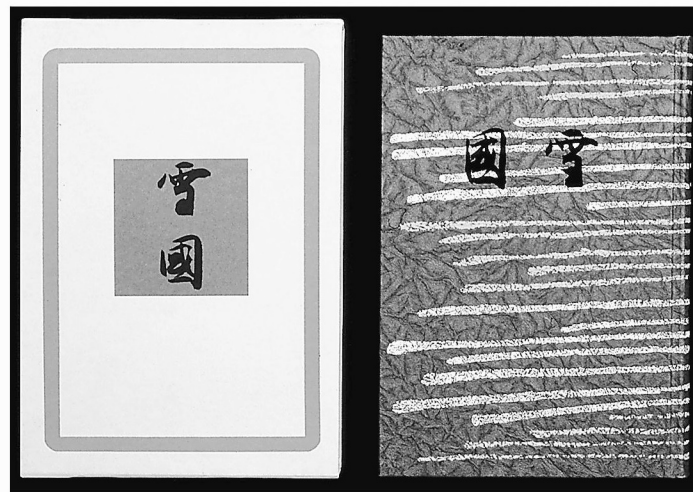
# 豊かな色彩 斬新な表現の181点

東北福祉大には仙台にゆかりのある型染の人間国宝、芹沢銈介（1895〜1984年）の作品などを紹介する美術館があります。芹沢は豊かな色彩と斬新な文様表現による着物やのれん、うちわ、カレンダーなど、用と美を結ぶ多種多様な作品を制作しました。今回は仙台市宮城野区の仙台駅東口キャンパスにある東北福祉大ギャラリミニモリで、芹沢がデザインした本の表紙や外箱、タイトルの書体や扉絵などの装丁作品や物語挿絵、下絵、試作、カットなど計181点を展示しています。

芹沢が生涯に手がけた装丁は600冊を超えます。始まりは、民芸運動の主導者柳宗悦が1931年に創刊した雑誌「工藝」の表紙を芹沢に任せました。一冊一冊、型紙で染めた布表紙が用いられ、話題となりました。また初期の装丁として、民芸運動に関わった精神科医の式場隆三郎の著作本も挙げられます。式場と毎回綿密な打ち合わせを重ね、表紙や箱などの装いを作り上げました。「オートレック」の表紙には堂々たる風格と絶妙な色彩を見ることができま

す。芹沢は、山本周五郎、海音寺潮五郎、山崎豊子ら、さまざまな作家から装丁の仕事を依頼されました。中でも文豪

## 企画展「芹沢銈介 本の装いと挿絵の世界」 東北福祉大芹沢銈介美術工芸館学芸員 奈良綾



芹沢銈介装丁「川端康成著『雪国』(箱・表紙)」  
(1937年、東北福祉大芹沢銈介美術工芸館所蔵)

川端康成の「雪国」の表紙には白石和紙が使われ、横線のシンプルな染め文様が素材の風合いを生かした装いとなっています。川端は何冊もの装丁を芹沢に依頼しており、「私はこれらの本ができた時、自分の本に温かい美しさを感じたよごびを思い出し、感謝を新たにするのである」と文章を寄せています。

挿絵の代表作には、海外の書籍コレクターの依頼で制作された「絵本どんきほつて」があります。西欧の物語を日本に舞台を置き換えた新たな着想があり、版本の挿絵に彩色した江戸時代の丹緑本を意識した見事な作品です。また、佐藤春夫「極楽から来た」など、新聞や雑誌連載の挿絵も担当しました。日本伝統の技法で物語を生きたと描き出すのは、芹沢意匠の真骨頂と言えます。

芹沢は暮らしに身近な本に、さりげなくも美しい装いを施しました。芹沢自身による制作時の解説や、川端などが語る「芹沢の装丁・挿絵」の魅力を併せて紹介しています。思わず手に取りたくなる芹沢の本の世界をご覧ください。

◇ 「芹沢銈介 本の装いと挿絵の世界」は21日まで、東北福祉大ギャラリミニモリで開催されている。